ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

終戦後の 8 月 22 日まで隠れていた真壁野戦病院壕の辺りで。新崎昌子証言員　2017 年 3 月 22 日

第 59 号

2017.5.31

目　次

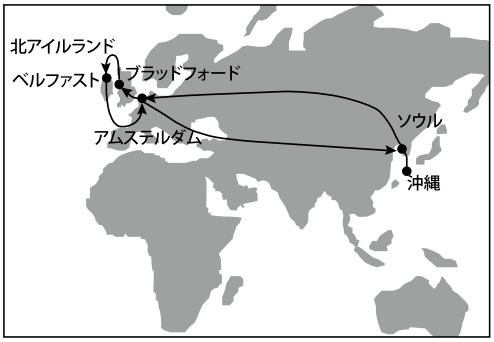
●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
ひめゆり・ヨーロッパ平和交流の旅Ⅱ / 教員のための展示ガイドツアー / 冬休み特別企画「平和講話」開催 /2017 年度ひめゆりガイド向け講習会 / 平和ガイドの会との合同学習会「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」/ 第 23 回日本平和博物館会議に出席 / 平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会に参加 /「ヒロシマ・ナガサキ・沖縄戦をめぐるシンポジウムと交流」に出席 / 東京大空襲・戦災資料センターとの交流会 / 特別展会期延長のおしらせ / ポストカード販売開始
● 2017 年度のイベント・事業・・・・・・・・・・・・・ 8
●コラム　相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
●統計に見る 2016 年度 / 資料館の動き（2016 年度）・・ 9
●ひめゆり研究ノート⑫
引率教師の実像（2）―東風平恵位先生・・・・・・・・・・11
●ひめゆり研究ノート⑬
ひめゆり学徒隊の引率教師たちとその時代（上）・・・・・・13
●仲宗根政善日記抄（55）・・・・・・・・・・・・・・・・15
●本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
●声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
●資料館ガイド（利用案内）・・・・・・・・・・・・・・19

資料館トピックス

◆ひめゆり・ヨーロッパ平和交流の旅Ⅱ

4 月 7 日～ 16 日、当館職員の諸見徳一、古賀徳子、長元歩、仲田晃子が「第 9 回国際平和博物館会議」に参加し、ひめゆり平和祈念資料館の取り組みを報告しました。さらに、当館の活動や展示リニューアルに生かすため、オランダ、イギリス、韓国の平和博物館の視察を行いました。今回の旅は、2003 年におこなった「ひめゆり・ヨーロッパ平和交流の旅」のパート 2 という位置づけで実施しました。

「第 9 回国際平和博物館会議」（平和のための博物館国際ネットワーク主催）は、4 月 10 日～ 13 日に北アイルランド（イギリス）ベルファストで開催され、22 ヵ国の平和博物館関係者や研究者、学生など 140 人が参加しました。



開催地のベルファストは、北アイルランド紛争の終結後、安全な都市へと劇的に変化しました。しかし、現在もプロテスタントとカトリックの居住区の間に巨大な壁が残されており、対立の根深さが感じられました。会議の開会式は、1998 年 4 月 10 日に和平合意が結ばれた記念日に行われ、対話によって平和を取り戻す「ピース・ピープル」の活動によってノーベル平和賞を受賞したマイレッド・コリガン＝マグワイアさんのスピーチも行われました。

会議では、説明員の仲田が「体験者から非体験者へ―ひめゆり平和祈念資料館の戦争体験の継承」と題して、当館の戦争体験者自身による資料館活動と次世代継承の取り組みを報告しました。この分科会には

分科会報告の様子　4 月 11 日

ポスターセッションの会場　お世話になった通訳ボランティアの橋本典子さん（左端）と

アンネ・フランク・ハウス　教育プロジェクト部長のヤン・エリック・ダブルマンさん（右から 2 番目）へのインタビュー

フリーデリー博物館　ブラッディ・サンデー事件犠牲者の遺族、ジョン・ケリーさん（中央正面）による説明

約 30 人の参加がありました。ポスターセッションでは、持参したポスターを展示し、職員たちが通訳ボランティアの方に手伝ってもらい、会場を訪れた参加者に説明し、交流しました。

会議の前後に、アンネ・フランク・ハウス (アムステルダム)、ザ・ピース・ミュージアム（イギリス・ブラッドフォード)、フリーデリー博物館（北アイルランド)、戦争と女性の人権博物館（ソウル）などを訪れ、各館の担当者に対応していただきました。それぞれ館のメッセージが伝わるような展示のデザインになっており、次の世代に歴史の記憶をつないでいくことが意識されていました。

この旅の詳細は、今年 12 月から 2017 年度企画展（第 6 展示室）にて報告する予定です。

◆教員のための展示ガイドツアー

2016 年 12 月 24 日に、「教員のための展示ガイドツアー」を開催しました。学校の先生方に当館の展示を知っていただき平和学習に活用してほしいと、2014 年から開催しているものです。8 回目の今回は、県内外から 8 人の参加者がありました。普段展示解説を行っている説明員が、児童生徒が関心を持ちやすい写真や実物資料などを中心に、60 分程度展示ガイドツアーを行いました。

その後、事前学習で使える資料や当館の体験メニューを紹介し、意見交換を行いました。参加者からは、「体験者から証言を聞くことが難しくなってきている今、学校で使える平和学習の教材化が必要である」、「『モノ』を通じて戦争体験を伝えると子どもたちが興味を持ちやすいのではないか」といった意見が出ていました。

展示を見ながらひめゆり学徒隊や資料の説明を行う

この企画は教員のみなさまが参加しやすいように、夏休みと冬休みに実施しており、2017 年度は 7 月 29 日（土）と 12 月 23 日（土）を予定しています。

日程が近づきましたら、当館ホームページ、facebook 等でもお知らせいたします。

◆冬休み特別企画「平和講話」開催

2016 年 12 月 25 日、27 ～ 29 日の 4 日間、冬休み特別企画「平和講話」を開催しました。

職員による「平和講話」は通常学校団体などへの予約制です。夏休みに初めて一般向けに開催したところ、継続を要望する声が聞かれたため冬休みにも開催する運びとなり、計 206 人の来場者がありました。

熱心に講話を聴く参加者

ご家族連れの姿が多く見られましたが、修学旅行の下見などで教員の入館も多く、修学旅行向けの「平和講話」を実際に知る機会にもなったようです。参加者からは、「(戦争の）つらさ、気持ちなどを知りました。私はまだ

11 才だけど、友達、親せき、できたらですが、自分の子どもにも伝えたい（11 歳　女性）」「子ども達に対して戦争の怖さを伝えていく義務があると思います。再び子どもたちを戦場に送らないために、ここで得た経験を伝えていきたいと思います（30 歳　男性　小学校教員）」「体験者から引き継いだ思いを、きちんと伝えていただきました（66 歳　男性）」などの感想が寄せられました。

◆ 2017 年度ひめゆりガイド向け講習会

3 月 13 日、ガイドのみなさまを対象に、「2016 年度ひめゆりガイド講習会」を開催し、10 団体 43 名の参加がありました。第 1 部の「ひめゆり平和祈念資料館とひめゆりの塔ガイドツアー」では、3 グループに分かれ、当館の学芸員、説明員のガイドで展示室と塔周辺を巡りました。展示のキャプションには書かれていない情報や誤解されやすい点の説明を行い、参加者からの質問にこたえるなどしました。

第 2 部では、「証言員（ひめゆり学徒生存者）との質疑応答」を行いました。参加者からは、「戦争が始まる前と後の学校生活はどんな様子でしたか」、「ガマの中の悪臭についてどのように説明したらよいですか」、「次世代、後世に伝えたいことはなんですか」などの質問が出され、証言員 7 人がそれぞれの体験をまじえて応えました。

参加者からは、「生存者の生の声が聞けてよかった」、「職員のガイドツアーでは詳細が、証言員からは実感のこもった意見が聞けた」、「証言員の平和を願う気持ちと、今後の世代の人の幸せを願う強さに触れた」、「戦争がいかに残酷で恐ろしいものかを伝えていけるガイドになります」といった感想が寄せられました。

展示室とひめゆりの塔周辺ではガイドツアーを行った

証言員との質疑応答

◆平和ガイドの会との合同学習会「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」

3 月 19 日に、開催中の特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」関連企画として、平和ガイドの会と当館の合同学習会を開催しました。会は沖縄県歴史教育者協議会委員長平良宗潤氏、当館副館長普天間朝佳の報告と質疑応答・意見交流を軸に進行しました。

平良氏は「『ひめゆり学徒隊の引率教師たち』から考えたこと」と題し、特別展によってひめゆり学徒隊の引率教師たちの実像が浮かび上がっていること、教師を取り巻く当時の社会状況が明らかにされてい

ることなどを評価しながらも、恩師への思慕の情が厚いため十分な批判ができていないのではないかという見解を示しました。普天間は「ひめゆり学徒隊の引率教師たちとその時代」として、圧倒的な戦争動員の歯車の中では、教師も小さな部品にしか過ぎず、重要なのはなぜ教師たちが歯車となって戦争への道を突き進んだのかをしっかりと見ていくことではないか、それが教師たちの体験を自分ごととして受け止めていくことにつながるのではないかと応答しました。

フロアからは「当時の教師たちと自分を重ね合わせて考えた」「現役の教師や若い人たちへもっと広報すべきだったのでは」「過去のことだけでなく、今起きていることにも目を向けるべきでないか」など活発な意見が出されました。館長島袋淑子は「現在の社会情勢で心配なこともあるが、戦争は人災、人が起こすもの。今なら止められる」と参加者へ訴えました。

質問にこたえる平良宗潤氏

約 40 人の参加者が耳を傾けた

◆第 23 回日本平和博物館会議に出席

2016 年 11 月 10 日・11 日の 2 日間、京都府で開催された「第 23 回日本平和博物館会議」に、館長島袋淑子、副館長普天間朝佳、説明員宮城奈々が出席しました。

はじめに、会場となった立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長安斎育郎先生の講演「世界の平和博物館の実情と課題」が行われ、定例会議では「平和館情報設置コーナーについて」、「ダークツーリズムについて」、「リニューアルについて」、「アウトリーチの取り組みについて」の 4 つの議題について話し合いました。会議終了後には学生ガイドの案内で展示室の見学を行いました。

翌日は北海道大学博物館教授湯浅万紀子先生の講演「博物館体験の長期記憶を探る－来館者調査の意義と課題－」が行われ、その後、ピースおおさか、広島平和記念資料館、当館からのコメントを交え、来館者調査の意義について認識を深めました。午後からは龍谷ミュージアムの視察を行いました。

安斎育郎先生による講演

◆平和のための博物館・市民ネットワーク全国交流会に参加

2016 年 10 月 29･30 日、東北では初めてとなる「平和のための博物館･市民ネットワーク全国交流会」が福島県白河市にあるアウシュヴィッツ平和博物館で開催されました。参加者も約 65 名と盛況な交流会でした。今回は、2017 年 4 月に開催される第 9 回国際平和博物館会議の情報収集も兼ねて、総務課長諸見徳一が参加しました。

東京学芸大学教授君塚仁彦氏から「〈歴史を逆なでする〉博物館のこれまでとこれから」という特別報告があり、当館の次世代継承の取り組みについても紹介して下さいました。気仙沼市のリアス・アーク美術館の紹介もありとても興味深い内容でした。法政大学非常勤講師栗山究氏、東京大学大学院萩原達也氏による「アウシュヴィッツ平和博物館実践の軌跡」についての特別報告の後、アウシュヴィッツ平和博物館と原発災害情報センターの見学をしました。会員からは 9 件の活動報告がありました。懇親会では開催地スタッフの皆様が手作りのおいしい地元料理を準備して下さり、楽しく充実した交流を持つことができました。

報告後に開催された懇親会

◆「ヒロシマ・ナガサキ・沖縄戦をめぐるシンポジウムと交流」に出席

2016 年 12 月 6 日に那覇市の沖縄県青年会館で開催された日本原水爆被害者団体協議会主催の「ヒロシマ・ナガサキ・沖縄戦をめぐるシンポジウムと交流」に、当館副館長普天間朝佳がパネリストとして出席しました。会は「沖縄戦とは何だったのか－沖縄戦認識と『援護法』」（石原昌家沖縄国際大学名誉教授）、「被爆者の願いと残された課題」（木戸季市日本被団協事務局次長）、「ひめゆり学徒隊と沖縄戦－その記憶と継承」（普天間朝佳）の３つの報告、その後の質疑・討論という日程で進められました。

被団協事務局次長木戸季市氏の報告

石原氏は、「非常時下では国民が等しく耐え忍ばなければならない」という国による受忍論の押し付けは、福島の原発事故の被爆者への政策にも共通しているという見解を述べました。木戸氏は、受忍論で被爆者の国家賠

償の要求が退けられてきた経過を報告、普天間からはひめゆり学徒隊の体験者が減少する中、職員が体験者と向き合いながら継承を進めていることを報告しました。参加者は約 60 名で、フロアからは被爆者と沖縄戦被害者との連携の必要性、次世代へつないでいくことの重要性が指摘されました。

◆東京大空襲・戦災資料センターとの交流会

2017 年 1 月 28 日、東京大空襲・戦災資料センターの「次世代継承研究会」のみなさんが来館し、戦争体験のない世代が戦争を伝えていくあり方をテーマに、視察、意見交換を行いました。今回、来館したのは、東京大空襲の体験者で、現在講演活動を行っている方 3 人を含む 11 人です。

説明員による案内で展示を見学し、多目的ホールで「平和講話」を聞いていただいた後、館長島袋淑子、副館長普天間朝佳、説明員仲田晃子と意見交換を行いました。空襲体験者の方からは、体験のない世代が客観的に伝えていることに感心した、センターでも若い人がもっと伝えていって欲しい、といった若い世代への期待の声がきかれました。また、非体験者の学芸員、研究員のみなさんからは、平和講話で使っている証言映像の編集はどのように行ったのか、説明員をどういう人に頼もうと考えたのか、体験者と非体験者が一緒に作業をするなかで、どのように話を共有したり、折り合いをつけるのか、など、具体的な質問が多くだされました。同じ課題に取り組むみなさんとの意見交換で、これまでの活動を別の視点からみなおす機会となりました。

活発な意見交換の場になった交流会

◆特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」会期延長のお知らせ

2015 年 12 月より開催中の戦後 70 年特別展として「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」は、本年 3 月 31 日で閉幕の予定でしたが、ご好評につき会期を 2017 年 11 月下旬まで延長することといたします。

2016 年 10 月 1 日にはミニリニューアルを行い、新たに「生き残った 5 人の教師たち」や、仲宗根政善の「戦争に引きずられていった罪」などのパネルと来場者の感想 15 点を加えました。

参観者のみなさまの感想文を拝見すると、今回の特別展を今の時代と重ね合わせて見ている方も少なく

ないようです。会期延長のこの機に、ぜひお運び下さい。

寄せられた感想
- 学徒さんが自決しようといったときの決断をせまられた先生はとってもつらく苦しいと思いました。（東京都　11 歳　女性）
- 教員や教師をめざす人には特に心にひびく内容だったと思う。見るべきだと思う（2016 年１月５日　岩手県　３１歳　男性）
- 教師が戦争中に果たした役割、胸にせまり、つらかったです。仲宗根先生の「いくら言い訳しても…」の言葉、忘れずに教師をやっていきたいと思います。「今こそ」の大切な特別展でした。（大阪府　５５歳　女性）
- 戦火の先生の「お国のための」と「生徒のための」という考えの中での葛藤がよく伝わってきました。沖縄戦がはじまる前の学校教育と先生たちの葛藤、また学校の雰囲気、教育がどんどん変わっていく中で先生たちのとまどいや思いなどがあれば、もっとよくわかると思いました。現在の日本の教育とかぶってくるところがあるかと思ったので。（年齢なし）

特別展の参観風景

追加した展示パネルを見る参観者

◆ポストカード販売開始

１月からポストカード（1 枚 150 円）の販売を開始しました。

『絵本　ひめゆり』の絵を担当した三田圭介さんが、水彩で温かみのある優しい絵に仕上げて下さいました。「ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館」、「女師・一高女校章と白百合」、「第４展示室の証言本を読む女性」です。購入者は女性が多いようですが、修学旅行生が購入する姿も見られます。来館の思い出にもなる絵柄です。ぜひ手にとってご覧下さい。

2017（平成 29）年度のイベント・事業

当財団では、今年度、下記のイベント・事業を計画しています。

○イベント

＊ 2017 年度企画展「ひめゆり未来へ－次世代継承の軌跡と展望（仮称）」
「2017 年ひめゆり・ヨーロッパ平和交流の旅Ⅱ（仮称）」

＊教員向け講習会（2017 年 8 月 16 日予定）

＊「夏休み平和講話－ひめゆり学徒の沖縄戦」（2017 年 8 月予定）

＊教員のための展示ガイドツアー（2017 年 7 月 29 日、12 月 23 日予定）

＊ガイド向け講習会（2018 年 3 月予定）

＊アニメ「ひめゆり」・証言ビデオ「平和への祈り－ひめゆり学徒の証言」の特別上映会
（春休み、ゴールデンウイーク、夏休み、冬休み期間中に予定）

○事業

1．ひめゆり平和祈念資料館の管理・運営事業
◎教育普及　◎ひめゆり学徒と沖縄戦の資料収集・整理保存・調査研究
◎ひめゆりの塔の管理及び慰霊祭の挙行　◎その他

2．ひめゆり関連戦跡壕の調査・保存・活用事業

3．ひめゆり平和研究所の設立に向けた準備事業（本年度、平和研究所を設立する）

○出版

『感想文集第 28 号』、『年報第 28 号』、「資料館だより」第 59 号、第 60 号、2017 年度企画展「ひめゆり未来へ－次世代継承の軌跡と展望（仮称）」と「ヨーロッパ平和交流の旅Ⅱ（仮称）」図録の発刊

相思樹

ひめゆりガイド向け講習会

説明員　宮城 奈々

今年の3月に当館の主催するガイド向け講習会が行われました。これは普段、沖縄戦を伝える活動に携わっているガイドの方たちを対象に行う講習会です。新人ガイドからベテランガイドまで、毎年多くの方が参加をされています。

その中で、私は展示室内のガイドを担当しました。決められた時間で全部の展示室をまわるため、ポイントを絞って説明をしなくてはなりません。ひめゆり学徒隊についてや当館の伝えたいことなどをある程度まとめて話すのですが、全てを満足に話すことは出来ず反省も多いです。また、もっとガイドさんたちの知りたいこと、展示の細かなエピソードについて話すことも必要だと感じました。

ガイドツアーを終えた後は、証言員との質疑応答が行われます。証言員の講話が終了した今、体験者の生の声が聞ける数少ない場となっています。とても和やかな雰囲気で、参加したガイドさんたちからも話を聞けて良かったという声を頂きます。中には質疑応答の時間を延ばして欲しいという声もあり、それだけ体験者の声が強く参加者に響いているのだということがうかがえます。

ガイド講習会は、参加者に情報を提供するだけでなく、こちらもガイドさんたちの疑問や考えを知る機会となり、同時に平和に対する思いを共有する場にもなっていると感じます。

これからもこうした交流を通して、一緒にひめゆりのことや沖縄戦について考え続けていけたらと思います。

統計に見る2016年度

※小数点第 1 位を繰り上げているため、合計が 100％でない場合もある。

1．総入館者状況（入館料免除を除く）

・昨年の入館者は 579,865 人（前年の 627,813 人より 47,948 人減少）。1 か月の平均入館者は 48,322 人、1 日平均は 1,593 人（慰霊の日、台風休館除く 364 日）。うち外国人は　6,116　人。
→開館以来 28 年間で 27 番目の入館者数。

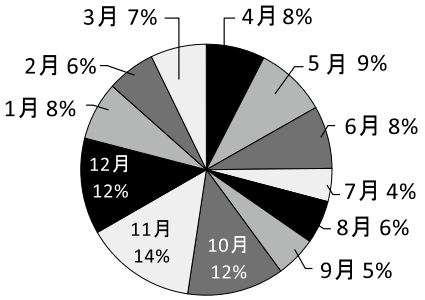
・開館以来 27 年間の累計は 21,638,614 人で、年平均入館者数は 772,808 人、1 日平均は 2,146 人（ただし、1989 年度の開館期間は 9 か月間）

2．月別入館者状況

・昨年 1 年間で入館者が多かった時期は修学旅行シーズンの 10 月～ 12 月の 3 か月間。3 か月間の合計は 226,830　人で、総入館者数の 39％（小数点以下を四捨五入。以下同じ）。

・入館者数が少ない時期は 7 ～ 9 月。3 か月間の合計は　87,641 人で、総入館者数の 15％。

月別入館者状況

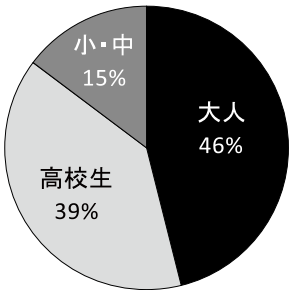


3．類別入館者状況

【総数】入館者の割合は、大人が 46％、高校生 39％（そのうち 98％が団体で入館）、小・中学生 18％（そのうち 76％が団体で入館）。28 年間の平均では、大人が 64％、高校生 25％（そのうち 95％が団体で入館）、小・中学生 11％（そのうち 65％が団体で入館）。

【団体】団体の割合では、特に高校生の割合が 66％と高く、次いで小･中学生 19％、大人 15％となっている。

類別入館者状況 (個人・団体含む）



4．学校団体入館状況

・昨年度、修学旅行で来館した学校団体は、2012 校、286,462 人（前年の 2,116 校、307,712 人に比べ－ 104 校、－ 21,250 人）。内訳は、小学校が 107 校で 5％、中学校が 620 校で 30％、高校が 1,285 校で 65％。

【都道府県別】

・小学校　沖縄 42 校、鹿児島 31 校、東京 8 校の順に多い。
・中学校　兵庫 78 校、大阪 71 校、岡山 66 校、徳島 50 校の順に多い。
・高　校　東京 192 校、神奈川 112 校、愛知 85 校、千葉 85 校の順に多い。
・沖縄の中学・高校の全体に占める割合は、それぞれ中学 3％、高校 0.6％。

【月別】

・12 月 17％、11 月 16％、5 月 16％、10 月 13％の順に多く、4 か月間で全体の 62％を占める。
・小学校　6 月 26％、5 月 25％、10 月 11％の順に多い。
・中学校　5 月 37％、6 月 19％、4 月 19％の順に多い。
・高　校　10 月 23％、12 月 20％、10 月 19％の順に多く、3 か月間で全体の 62％を占める。

5．入館料免除

入館料免除総数　33,390 人

・団体（県内学校団体・特別支援学校・一般団体含む）	158 団体	6,684 人
・学校団体引率者		18,566 人
・修学旅行下見	580 校	1,571 人
・個人免除者（身障者手帳等提示の方）		4,546 人
・慰霊の日（6 月 23 日）		2,023 人

※沖縄県内学校団体は、入館料免除となるため、総入館者数には含まれない。ただし、学校団体の総数及び人数には含まれる。

資料館の動き（2016 年度）

2016 年 6 月 15 日	うるま市立具志川中学校（沖縄県）で説明員による館外での平和講話初実施
6 月 23 日	第 70 回ひめゆりの塔慰霊祭／アニメ「ひめゆり」DVD 販売開始
7 ～ 8 月	夏期開館時間延長実施（閉館時間を 18:25 に延長）
7 月 29 日	島尻地区教職員 10 年経験者研修（10 年研）初受入
7 月 30 日	教員のための展示ガイドツアー開催（12 月 24 日にも開催）
8 月 6 日	歴史教育者協議会第 68 回沖縄大会で説明員 2 人が報告
8 月 10 日	2016 年度教員向け講習会開催
8 月 11・13・14 日	「夏休み元ひめゆり学徒の戦争体験講話」開催
8 月 19 日	糸満市教職員初任者研修（初任研）初受入
8 月 23 ～ 28 日	「夏休み次世代の平和講話＆説明員トーク」開催
10 月 1 日	特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」ミニリニューアル
10 月 21 日	英語版ガイドブック『HIMEYURI PEACE MUSEUM The Guidebook』発行
10 月 29・30 日	平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会に総務課長が出席
11 月 10・11 日	第 23 回日本平和博物館会議に館長・副館長・説明員が出席
12 月 6 日	「ヒロシマ・ナガサキ・沖縄戦をめぐるシンポジウムと交流」（日本原水爆被害者団体協議会）に副館長出席
12 月 25 日・27 ～ 29 日	冬休み特別企画「平和講話」開催
2017 年 3 月 13 日	2016 年度ガイド向け講習会開催
19 日	特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」関連平和ガイドの会合同学習会開催

ひめゆり研究ノート⑫

引率教師の実像（2）― 東風平恵位先生

東風平恵位先生は、沖縄師範学校女子部（以下「女師」と略記）の音楽担当だった。教え子たちの証言からは、音楽の才能あふれた青年教師だったことが伺える。彼は、ひめゆり学徒隊の引率教師として第三外科に配置され、米軍の攻撃により伊原第三外科壕で生徒たちとともに命を落とした。この号では東風平恵位先生について紹介したい。

1．ピアノに向かっていた時代

1921（大正 10）年 3 月 10 日、平良村（現宮古島市平良）でうまれる。「幼少の頃から音感にすぐれ、水タンクから落ちる雨だれの音に違いがあると姉に話していた」ほど耳が鋭敏だった。平良第一尋常高等小学校、沖縄師範学校へと進学。師範学校在学中、ピアノに夢中で夕食をとるのも忘れたり、夜中に起きて練習したりと寝食を忘れて音楽に没頭していた エピソードが学友らによって証言されている[1]。

卒業後、東京音楽学校師範科（現東京芸術大学音楽部）に進学。当時東風平家は父の織る宮古上布を売って生計を立てていたが、5 人の子どもの養育と本土への仕送りは大変だったようだ。戦況の悪化で上布は贅沢品となり販売できなくなってしまう。職を変えながらも、息子の卒業を楽しみに何とか仕送りを続けていた。1943 年に卒業し、10 月、女師に音楽担当教師として赴任、ブラスバンド部の顧問も務めた。

芸術家肌で身なりに無頓着だったが、音楽の才能は生徒たちを魅了した。「ピアノに向かった時の先生の顔はとてもひきしまって男らしく見えた」し「きれいな歌声も印象に残っている」[2] という。

しかし、当時はのびのびと音楽を追究できるような状況ではなかった。音楽は「国策の遂行に充分副え得るものでなくてはならない」（兼村寛俊「飛行機献納音楽会」『沖縄教育　第 328 号』1944 年 2 月）と考えられていた。東風平先生も 1944 年の「飛行機献納音楽会」開催に尽力[3] し、「球七〇七一部隊の歌」を作曲する[4] など戦意高揚にも一役買っていた。

同年夏、東風平先生は宮古・八重山出身の生徒たちとともに宮古島へ帰省。ブラスバンド部で指導を受けた一高女 4 年知念淑子は、八重山に帰省した。後に東風平先生から葉書が送られてきたという。

（前略）＜もどってくるな、両親と一緒に台湾に疎開して、向こうで成人しなさい。＞（中略）＜僕はやがて安里ガ原へ舞い戻るだろう、今後どういう歌を歌うのだろうか＞と書いた葉書が送られてきたんです。
一高女４年　知念淑子（旧姓仲吉）[5]

さらに、十十空襲以降、本科 1 年松田其枝（旧姓田場）がピアノのレッスンをしてほしいと申し出たところ「今さら勉強したってつまらないじゃないか、戦争で死んでしまうのに、どうして勉強するんだ」と断られ、松田はとても残念だったが、一度だけ弾いてくれた「月光」の曲はとても素晴らしかったという[6]。

知念、松田への言葉からは、東風平先生が戦局の悪化に悲観していたことがわかる。

2．「捕虜になってもいいから、死んではだめだよ」

1945 年 3 月 23 日、女師・一高女の生徒は沖縄陸軍病院に動員される。当初東風平先生は数名の生徒とともに男子師範部の留魂壕にいた。東風平先生が陸軍病院に移動したのは 5 月 13 日[7] だった。そのことは、本科 2 年本村つるの記憶にも残っている。

五月中旬頃でした。西岡部長先生、附属大道国民学校教諭の銘苅秀先生、東風平恵位先生、専攻科生の波平貞子さん、本科二年の上江洲浩子さんが首里からいらっしゃいま

した。（中略）「これは部長先生の油みそです」といって銘苅先生が大事そうに持ってきていました。東風平先生が、「戦争中に部長の味噌ってあるか」と食べていらっしゃいました。それをみて、私達は、はらはらしていました。東風平先生はその時、「捕虜になってもいいから、死んではだめだよ」とおっしゃっていました。それを聞いて私は不思議に思いました。
本科２年　本村つる（旧姓佐久川）[8]

「部長の油みそ」を食べて叱られるのではと本村ははらはらしているが、その際「捕虜になってもいいから、死んではだめ」だと言われる。それを聞いて「不思議に」思う。彼女たちは「米兵に捕まって捕虜になるぐらいなら死んだほうがいい」としか思っていないのだから、その言葉を奇異なものとして捉えたに違いない。

予科３年与那覇百子（旧姓上地）は、6 月 18 日、東風平先生と次のような会話をしている。

「いいか、上地。死ぬなよ、絶対に死ぬんじゃないぞ」
その言葉に、私は思わず言い返しました。
「先生、なぜそんなことを言うのですか。今日まで大勢の仲間が死にました。これからどうやって生きていけばいいんですか。私たちには、もう死ぬことしか残されていないのです」
「そんなことはない、生きられる。何があっても、絶対に死んだらだめだ。生きるんだよ」
「……分かりました。じゃあ、先生も生きてください」
「おれはもう、だめだ。だけど上地、おまえは生きてくれ」
（『生かされて生きて　元ひめゆり学徒隊“いのちの語り部”』与那覇百子　天理教道友社　2011 年）

東風平先生は、折に触れて生徒たちに生きることを説いたが、生徒たちにとって、その言葉は理解できるものではなかった。戦後、本村は東風平先生の言葉を思い返してこう述べている。

（前略）やっぱり生きたかったはずですよ、東風平先生はね。そんなことをおっしゃっていましたよ。非常にこれは疑問だった、あの頃の私にとっては。捕虜にはならない、ならないと思っているところだったから、それは疑問でしたね。
本科２年　本村つる（旧姓佐久川）[9]

第三外科勤務の本科１年宮良ルリ（旧姓守下）は、戦争中「女師一高女の生徒じゃないか。誇りを持て。もう少しの辛抱だ」と励まされたという。

1945 年 6 月 19 日、東風平先生のいた伊原第三外科壕は米軍の攻撃を受ける。宮良は壕の中で東風平先生が歌う「海ゆかば」と「パアーンという音」を聞いて「自決なさったのかなあ」と思ったという[10]。自決かどうかは定かではないが、東風平先生の命はそこで絶たれてしまった。

３．アメリカに留学して自分の才能を伸ばしたい

期待をかけて卒業させた息子が亡くなったと知った時の父の衝撃と悲しみはいかばかりだっただろうか。女師に赴任してまだ２年もたっていなかった。妹武富文子によると「将来はアメリカ留学もして、自分の才能をのばしたいという夢もよく語って」[11] いたという。音楽家として大成したいという夢は戦争によって潰えた。

目に親し　相思樹並木
行き帰り　去りがたけれど・・・

1945 年３月、女師・一高女の卒業式で歌うはずだった「別れの曲（うた）」。福島県出身の太田博少尉[12]の詩に東風平先生が曲をつけた。当時としては珍しく軍国調ではない、門出の喜びと別れの寂しさを表した素晴らしい曲だが、戦場での卒業式でこの歌は歌われず「海ゆかば」が歌われた。現在、遺作となった「別れの曲」は、ひめゆり資料館の第４展示室で流されており、生徒たちの遺影とともに、戦争のおろかさと平和の尊さを訴えかけている。　（学芸課　前泊克美）

1『龍潭　会誌 15 号』（龍潭同窓会 , 1996）
2『墓碑銘―亡き師・亡き友に捧ぐ』（ひめゆり平和祈念資料館 , 2014）
3「東風平君が東奔西走駈けずり回り、それこそ寝食を忘れて各方折衝を重ねやっと出来上った。この催しの裏に同君の隠れた努力のあった事を明記し深甚の謝意を表す次第」（兼村寛俊「飛行機献納音楽会」『沖縄教育　第 328 号』1944 年２月）
4「懐かしい思い出　苦い体験」前原線　（『創立三十周年記念誌～回想～』三・三会編集委員会 , 1992　沖縄県立第三中学校）
6「〔手記〕平和と愛とのきよき朝を―沖縄戦の体験―」（松田其枝　発行年月日不明）
7『ひめゆりの塔―学徒隊長の手記―（新装版）』（西平英夫　雄山閣 , 2008）
11「幸せ奪った戦争」武富文子（1996 年 6 月 21 日沖縄タイムス）
12 太田博少尉：福島県より沖縄に応召された。女師・一高女（ひめゆり学徒隊）の勤労動員先で指揮を執っており、生徒たちへ「相思樹の詩」と銘打った詩を贈った。
5 知念淑子、8 本村つる、10 宮良ルリによる証言は「ひめゆり沖縄戦資料集」による。
9 本村つるの証言は「一人ひとりの戦跡めぐり」反訳より抜粋。（読みやすさを考慮して改行等の調整を行った）

ひめゆり研究ノート⑬

ひめゆり学徒隊の引率教師たちとその時代（上）

＊本稿は、ガイドの会と当館の合同学習会で報告した内容を文章化したものです。

１．ひめゆり学徒隊引率教師たちが教員となった 1930 年代という時代

1930 年代：世界大恐慌、労働争議、大凶作、経済的困窮、思想弾圧、思想統制

ひめゆり学徒隊引率教師たちが教員となった 1930 年代は、世界大恐慌による経済の衰退、賃下げや首切りによる労働争議の多発、失業者の激増[1]、農村の大凶作、それらに伴う国民生活の困窮、外来思想による天皇制国家主義の動揺と、まさに国家的な危機の時代であった。そのような国家的な危機に対し、政府や軍部は様々な対応策を模索していくが、その一つ、天皇制国家主義の動揺への対応策として打ちだされたのが強力な「思想統制」であった。

大正期から昭和初期にかけ、日本に自由主義や個人主義、社会主義などの外来思想が流入してくるが、中でも社会主義に対しては天皇制国家主義を根本から揺るがすものとして、徹底的な思想弾圧が行われた。政府や軍部は多発する労働争議を指導しているのは社会主義者たちであると考えていた。

1928 ～ 1932 年：共産党員の大検挙、学生課、学生思想問題調査委員会、国民精神文化研究所

1928（昭和 3）年 3 月 15 日と 4 月 16 日、全国的に共産党員の大検挙が行われ、多数の学生も検挙された。同年 10 月には大学生の思想対策のために文部省に「学生課」が設置され、3 年後の 1931（昭和 6）年 6 月には「学生思想問題調査委員会」が設置される。さらに社会主義思想は中等学校や小学校の教員の間にも広がりを見せていたため[2]、その対策として同じ年の 9 月には「小学校教員の思想問題に関する地方教育者協議会」が開催された[3]。

1932（昭和 7）年 8 月、文部省は思想統制の有力な機関として「国民精神文化研究所」を設置する。その設置目的は「我が国体、国民精神の原理を闡（せん）明し、国民文化を発揚し、外来思想を批判し、マルキシズムに対抗するに足る理論体系の建設」[4] であった。この機関は研究だけでなく教員への皇国思想の教育機関としても機能するようになり、沖縄からも沖縄県女子師範学校[5] の仲宗根政善をはじめ、指導的立場の教員が送り込まれていく。

1933 ～ 1935 年：第四期国定教科書、国体明徴運動、教学刷新評議会

1933（昭和 8）年 4 月、第四期国定教科書の使用が開始される。満州事変後特に高まってきた国家主義思想の影響を強く反映し、それに関する教材が多く取り入れられることになった[6]。

1935（昭和 10）年 2 月 18 日の貴族院本会議で、菊池武夫男爵議員（予備陸軍中将）が美濃部達吉の天皇機関説を「皇国の国体を破壊するようなもの」として攻撃、以後、「国体明徴運動」へと進展する。この運動のねらいは従来の天皇機関説に立脚してきた国家秩序の再編にあり、その影響は学説問題に止まらず、教育、政治、思想、宗教界にまで及んだ[7]。その流れの中で同年 11 月には文部省に「教学刷新評議会」が設置され、同会の答申をもとに天皇の神格化という路線で教育が再編されていく[8]。

1937 年：『国体の本義』発行、日中戦争、国民精神総動員運動

1937（昭和 12）年 4 月、1930 年代の思想統制の集大成ともいうべき『国体の本義』が文部省によって発行される。同書では日本は万世一系の天皇の祖先が治める神国とされ、天皇は現人神であり、親への孝と天皇への忠は一本であり、忠君愛国こそ臣民の生きる道とされた[9]。同書は全国の教員や師範学校生徒等に配布され、皇国思想が教え込まれた。

同年 7 月には盧溝橋事件に端を発し本格的な日中戦争が始まり、翌月の 8 月には「国民精神総動員運動」が始まった。同運動は、日中戦争の勃発

によって、戦争政策に対する国民の支持をさらに強固にする必要が生じたために政府が上から起こした国民運動であった。スローガンは挙国一致、尽忠報国、堅忍持久で、実践事項としては、日本精神の昂揚、社会風潮の一新、銃後後援の強化・維持、非常時財政・経済政策への協力、資源の愛護等であった。

ひめゆり学徒隊の引率教師たちは、まさにそのような時代に教師となり、生徒たちに皇国思想を教える役割を担っていくようになるのである。

1937 年以降：国民精神総動員運動の本格的な波が「女師・一高女」にも…

しかし、1930 年代初めからの時代の波が沖縄そして「女師・一高女[10]」に、本格的に押し寄せてくるのは「国民精神総動員運動」以降である。運動の土台となったのは 1930 年代の思想統制で構築された皇国思想であった。

当時沖縄の教員のほぼ全員が加入していた「沖縄県教育会」の機関誌『沖縄教育』を見ると、皇国思想や国民精神総動員運動に関する記事が登場するのは 1937（昭和 12）年 10 月発行の「国民精神総動員特集号」以降であり、それ以前の号にはほとんど見当たらない[11]。

女師・一高女でも同様で、日中戦争の時局や国民精神総動員運動に関する記事が出てくるのは 1937 年度の校友会誌（文集）の『姫百合　第十二号時局特集号』（1938 年 4 月）以降である。同号では巻頭で川平朝令校長が「銃後の誓」と題し日中戦争勃発の経緯と銃後の覚悟を諭しているほか、「前線より銃後へ」と題した出征兵士からの便りや「銃後文苑」と題した生徒たちの作文（「千人針に集う」「南京陥落の日」「銃後の愛国心」「戦地の兄さんへ」など）が掲載されている。

皇国思想の念を強くし、学園への普及に努めた川平朝令校長

川平校長は、「銃後の誓」の中で、帝国議会での天皇の言葉「日本は中華民国との提携協力により東亜の安定を確保し共栄の実を挙げることを考えていたが、中華民国はそれを理解せず無闇に事を構え事変が起こった。今や私の軍人が忠勇を致しつつあるのは中華民国に反省を促し東亜の平和を確立しようとするのにほかならない」（原文を要約）を引用する形で日中戦争の“意義”を解説している。

1939（昭和 14）年に女師・一高女に赴任した横井鹿之助によると、「（川平校長は国家式典に参加し、）現人神天皇への崇敬の念を強くし、御民われ生けるしるしありの感慨を深くして帰って来た。この歴史専攻の校長にとっては、もはや神国日本は信念であり、天照大神を祭り礼拝することは神国の民の美わしい風習であるべきであった。（中略）職員朝礼が校長を先頭に職員一同がそろって神棚を礼拝することから始められるようになったのも当然である」という。温厚で生徒たちにとっては父親のような存在だった校長も、確実に時代の波に洗われ、皇国思想の念を強くし、それを学園に普及する活動に熱意を傾けていくことになるのである[12]。（60 号につづく）

（学芸課　普天間朝佳）

1：ひめゆり学徒隊引率教師の一人である仲宗根政善は、1932（昭和 7）年に東京帝国大学を卒業し、東京での就職を希望していたが、代用教員の口さえも見つからず、沖縄に戻り県立第三中学校の教員として職を得る（長元朝浩「相思樹に吹く風－仲宗根政善と時代」沖縄タイムス 1911 年 11 月 25 日）

2：1931（昭和 6）年までの沖縄の小学校教員の検挙者は 56 人で、人口比では全国 2 位であった（林博史『沖縄戦と民衆』2002 年大月書店）。

3：萩野富士夫「「思想統制」から「教学錬成」へ －文部省の治安機能－小樽商科大学学術成果コレクション」

4：1932 年、学生思想問題調査委員会の答申（前田一男「国民精神文化研究所の研究一戦時下教学刷新における「精研」の役割・機能について」NII-Electronic Library Service）。

5：仲宗根が派遣された 1937（昭和 12）年の名称。沖縄師範学校女子部となるのは 1943 年から。

6：海後宗臣他『教科書で見る近現代の日本の教育』1999 年東京書籍

7：小野雅章「国体明徴運動と教育政策」『教育学雑誌 第 33 号』1999 年

8：（国体明徴運動は）教学刷新評議会の答申で完成した「家族国家観のもとでの総家父長に代わる、現人神＝天皇のイメージ」を、広く普及するための体制を作り上げたことにあるといえよう（小野雅章前掲書）。

9：文部省編纂『国体の本義』（第 6 刷 1941 年）

10：「女師・一高女」は、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の略称

11：ただし、確認できるのは 7 月号以前の号であり、その直前の 8・9 月号は未発見のため確認できていない。

12：横井鹿之助『遠い昔』（県立第一高女昭和 18 年卒同期会発行）

仲宗根政善日記抄（55）

〔1980 年〕四月十三日

一昨日は、朝から豪雨であった。昨日も雨が降りつづき、今朝も小雨が降っていたが、午後から、小降りはやんで、空には、雨をふくんだ雲がおうている。仏桑の花は露をふくんで真紅に咲いている。庭の白百合も咲いた。雨がやみ急に静まりかえると、摩文仁の戦野が浮ぶ。熾烈な爆撃がやんで、しっとりとぬれた野は、ほんのしばらくの間の静寂をとりもどした。生徒たちは、雨で湧きあふれる波平の泉へと水汲み洗濯に行き、岩かげにかくれていた傷病兵がはい出て、畑に出て野草を拾い集めるのが聞えた。その瞬時の雨の晴れ間をたのしんだのである。

今は雨が晴れて静かになると、南国の美しい空のかがやきが、雲間からのぞいて来る。平和の光なのである。こんな雨の晴れ間にわれわれには、いまわしい戦争の思い出がわく。

どこからともなく、遠く爆音が聞える。世の人々は、ただ聞き流しているのであろう。しかし、沖縄戦を体験した者には、あのうすをひくようなにぶい爆音がまるで、悪魔の声のように聞える。雨のやんだあとには、必ずしれつな爆音がつづいて、壕はゆる。周へんに必ず血を見たからである。

雨あがりに、比嘉堅昌診療主任が、波平の壕まで訪ねてきてくれたことがあった。えんどう豆が、露をきらめかして青い実をたわわにつけていた。それをちぎってかみながら立っていた姿が忘れがたい。砲声もすっかり止んで、野が静寂にかえった一時であった。

六月十九日の未明、負傷して帰った私を介抱しながら、大した傷ではないと元気づけてくれた。その朝、私にすこしおくれて、軍医たちも壕を脱出した。私は山城の丘へ登る坂道で上原婦長を見かけた。友の肩によりかかりながら、まるで翼の折れた小鳥のようにして坂を上って行った。糸満の出身で、婦長には先祖代々波濤を乗り越えて来た血が流れていて男まさりであった。嘉数ヤス子が生埋めになったとき、兵といっしょに掘出し作業にかかり、土まみれになって出てくる兵士を抱きかかえひきずり出し、三角兵舎へとわきをかかえ肩をかしてつれて行ったあの様子はまるで鬼をとりひしぐようであった。全身がたがたとふるえている患者をつよくおさえつけながら注射をうっている。天使のようにも思われた。

やがて、嘉数も掘り出されて、上半身が出た。上原婦長がいちはやく、両脇をかかえてひきあげようとしたがあがらなかった。手首を握って脈をとったが、すでにことときれていた。婦長の涙がぽろぽろと嘉数の黒髪にこぼれているのを見た。

まもなく、嘉数の上に土くずれがあって再びうまってしまった。掘り作業に従事していた兵隊も一人去り二人去りして、ついに婦長と二人だけになりやがて婦長も去った。一人ローソクをともして、夕食をすませて再び来てくれる兵隊を待って、地中にもがいている嘉数を前にしていた。

あの鬼をもひしぐ婦長が、看護に精魂をつかいはたして、よろよろになって私の前を歩いている。かけることばもなく、そのそばを過ぎた。私も首に負傷をして血だらけだった。いずれ同じ運命だと感じていたのかもしれなかった。

あくる六月二十日の日に山城の丘で、足先に砲弾を受けた。比嘉診療主任も、その後を追うていたのであろうか。そばにいた。介抱しているところへ砲弾がおちて二人とも即死したと伝えられる。

南風原陸軍病院撤退の朝、敵兵が壕のすぐ直前にせまった。他の軍医はいち早く壕を逃げ出した。比嘉診療主任たった一人、軍医室の板の上にあおむけになって、煙草をふかしていた。まるく円をえがいてふき出す煙につぎつぎと消えた。私はその平静な姿にすっかりおちつきをとりもどした。あわてふためいている自分がはずかしくなった。そのときは気がつかなかったのだが、上原婦長が、やはり重傷患者を前にして、沈着冷静に比嘉診療主任の指示通りに立ち働いていたのである。比嘉診療主任といい上原婦長といい、重責を負い、沈着冷静に最後の最後まで、力のある限りを尽して、責任を果してはてたのである。世にはその業績も伝えられずに、敗戦のかげにうずもれてしまった。

雨のやんだ春日の静けさの中に二人の面影がありありと浮ぶ。

〔1980 年〕四月十七日

米国はイランへの強行政策を打ち出した。経済制裁からひいては軍事介入も辞せないという。すでにソ連で行われるオリンピックにも不参加をきめた。イランとの関係は悪化の一路をたどり、ひいては米ソ関係の悪化につながって行く。すでにイラン国境周辺に、ソ連が戦闘体勢をととのえつつあるとも伝えられる。

日本はアメリカ寄りにただ静観しているのみである。この情勢の中にわってはいって、ヨーロッパ共同体ともっと緊密に連携しつつ、イランと米国の悪化の情態を打開する方法を見出そうとする努力にかけている。今回の日本の態度からすると、やがて、軍事介入へと発展して行くと、ただアメリカのいうなりにずるずるひきずられて、戦争へまきこまれる危険性が多分にある。国内には防衛を強化しよとの声が高まりつつある。極めて危険なことである。日本を戦場に提供するつもりなのか。おそるべき原爆の時代に、一歩一歩戦争へと近づきつつあることは、おそるべきことである。

庭に二、三輪百合の花が咲いた。五月の空は晴れ渡っている。

〔昭和〕二十年※1 四月八日のことだったと記憶する。ひめゆりの塔の除幕式と第一回の慰霊祭をすませて、私は再び米須の海岸に立った。前日慰霊の日※2の朝、渚にごろごろところがる白骨を見、岩の上に打ちあげられた白骨を見、無数の白骨が、島尻の戦争にごろごろしていると身の毛がよだった。真和志村民が総出で、遺骨を拾集して数千体を魂魄之塔に納骨したというのに、そのすぐ後の海岸の渚に無数の白骨が波にさらわれながらごろごろしている。

いはまくらかたくもあらむやすらかに
ねむれとぞいのるまなびのともは

の歌は、実は白波にさらわれて渚にごろごろところがる白骨を見ていながら、洞窟に朽ちはてて行く生徒たちのことを思いうかべたときの悲しみだった。摩文仁が丘には、白雲がたなびいていた。その巌かげに将兵とともに、師範鉄血勤皇隊の健児らの遺骸がうずもれている。最後まで奮戦した健児らの悲痛な声がいまも聞えているような気がした。

みんなみのいはのはてまでまもりきて
ちりしたつのこくもまきのぼる

こんな歌を作った。

私はどうしても、自分らが最後につかまった、喜屋武断崖の上まで行って見たかった。米須の海岸から岩の上に上じ、阿旦※3のしげみをわけてすすんだ。戦争によって焼き払われていた阿旦も草木も、一年近くもたっていたので、新芽を吹き出していた。青い葉かげの中をのぞくと黒こげた幹がからみ合っていた。昨夜の小雨にしっとりと濡れそぼっていたが、さいわい、四月の太陽が照って、草木の葉はかがやいていた。

私はまだ上里海岸※4で平良松四郎先生以下生徒十名が自決をとげた場所を知らなかった。その岩もよじて、西へ西へと歩いて行った。六月十九日、死の解散を命ぜられて、壕を出て直後、至近弾で負傷し、ふらふらしながらやっとこの海岸までたどりついたのであった。敗走する将兵も、陸軍病院解散後、看護婦生徒たちも、民間人も、進撃する敵兵からのがれて、南のはてのこの海岸へと追いつめられて来た。阿旦のかげには、食もなく飢えたこれらの人々が、絶望したまま倒れ伏していたのである。やがて阿旦や岩の上に伸びた阿旦や草木いっさいが、戦火にやけて、このかげに死にたえて行ったのである。一年経ってやっと焼けた草木の根から新芽をふいては来たもののやけこげてからみあっている阿旦のかげには無数の遺骸がよこたわっていた。渚に近い岩の上は、草もむさず、荒波にあらわれて、まるで針山のようであった。敵兵に追われながら、この上をさまよったのであるが、今、春の海にさざなみが立ち、岩にくだけている。一歩一歩歩いて行くと、阿旦のかげからもしのびなく亡者の声が聞えてくるように感じられた。

ところが岩の上をおおいつくすように白百合が一面に咲いているのである。岩もこげてやきつくされたのに、いったいどこにかれんな白百合はその根をたもっていたのであろうか。春の陽光をあびて伸びよ伸びよと咲き乱れている。夢ではなかろうか。一体誰が、沖縄最南端のこの岩の上をおおいつくして、これほどに白百合の咲きほこっていることを想像している者がいるのであろうか。あのむごたらしい戦争などがこの地にあったとはとても想像もつかない。（60 号へつづく）

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。
※〔　〕は編集による。旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。
※1 二十年：昭和 21（1946）年の誤記
※2 前日慰霊の日：1946（昭和 21）年 4 月 7 日に行われたひめゆりの塔除幕式と第一回慰霊祭のこと。
※3 阿旦：正確には阿檀。アダン。タコノキ科の熱帯性常緑低木。沖縄や台湾に自生し、沖縄では防潮林として海岸に植えられている。沖縄戦中、逃げ惑うひめゆり学徒や住民らは砲弾から逃れるために生い茂ったアダンの林に身を隠したが、米軍の火炎放射器によって焼かれ、あぶり出された。
※4 上里海岸：荒崎海岸のことか。

本　棚

仲程　昌徳

本村つる『ひめゆりにささえられて』

待望の書である。その大きな理由はふたつ。ひとつは、本部に配属された学徒の記録がやっと出てきたという点である。

三月二十三日、南風原陸軍病院に動員されたひめゆり学徒たちは、病院が集中攻撃を受けた三月二十四日のあと学徒隊長西平英夫による再度の編成替えで本部付、第一外科付、第二外科付、第三外科付、経理部付等に割り振られ、それぞれの配属先での業務につくことになる。そのために、学徒たちの体験が大きく異なるものとなっていく。

これまで、ひめゆり学徒の記録としては、宮良ルリの『私のひめゆり戦記』、宮城喜久子の『ひめゆりの少女　十六歳の戦場』、伊波園子の『ひめゆりの沖縄戦―少女は嵐のなかを生きた』、与那覇百子の『生かされて生きて　元ひめゆり学徒隊“いのちの語り部”』等があるが、宮良は第三外科、宮城は津嘉山経理部、伊波は第二外科、与那覇は第一外科に配属された学徒であったということで、四つの書は、それぞれの配属先での戦場の様子を中心にして書かれた記録になっていた。本部に配属された学徒の書いたものが欠けていたのである。

もちろん、本部に配属された学徒の記録がなかったわけではない。仲宗根政善の『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』には、本書の著者の旧姓、佐久川ツルの手記が収録されていた。本部付の学徒たちが、どう活動したのかそれである程度わかるのだが、単独の著としてはなかったのである。これで、配属先の異なるひめゆり学徒たちの戦場記録がほぼ出揃ったことになる。

本村の、最初の戦場体験記となったのが『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』に収められた手記ではないかと思われるが、それは五月二十五日から始まっていた。その日は、陸軍病院が南部へ撤退することになった日で、手記には「四月三十日ごろ負傷した石川清子さんや山城芳子さんは、傷が重く、まだまだ安静状態にあった」とある。しかし本書では「五月八日、大詔奉戴日の朝、その日はいい天気だった。私たちは必勝祈願をし、久し振りにみんなが壕入口でお日様を仰いだ。中に入るやいなや至近弾の音が轟いた。振り返ると石川清子さんが太ももから真っ赤な血を流しよろよろ歩いてきた。山城芳子さんが壕の外に飛ばされて見えない」とあって、石川、山城の二人が傷ついた日付に違いが見られた。どちらの日付が正確かといった問題はあるし、その他削除、加筆等あって両者には多くの違いがあるのだが、実見したことがありのままに記されていることは二つの引用からわかることである。

本書が待ち望まれた書だとする二つ目は、ひめゆり平和祈念資料館に関する大切な記録になっているという点にある。資料館設立の話が決まったのは一九八二年。さまざまな困難を乗り越えて開館したのが八九年。以後、本村は、二十六年間平和へのメッセージを訴え続けてきただけでなく、二〇〇二年から館長として運営の任にあたった。その多忙ぶりについて触れることは抑えられていて、そこにあふれ出ているのは、ひめゆりを伝えたいという一心と、来館者への心からの感謝の念である。

「ひめゆり」と聞くだけで、気が重く、手に取るのを遠慮してしまうむきもあるだろうが、本書は、戦場記録だけではない。たとえば、口絵の一枚に描き出されている光景―「やがて太陽が慶良間の海に沈む頃、真っ赤な夕日を背にして、それぞれの家路についた。私は小さい弟を背にして、妹の手を取り、長いながい影絵を踏んで帰っていった」といった、誰の心にもやどる、遠いとおい、懐かしさにあふれる時代を懐古した、幼少女期の思い出をほのぼのと綴った箇所をはじめ、女学校時代の回想―「一日の教科を終えると、仲の良い友だち同士三々五々、教室の中で或は近くの陸軍墓地で遊び興じたり、しんみり話し込んだり、わけもなく笑いころげあったりもした」といった、これまた誰もが体験したであろう青春の記憶が生き生きと記され、さらに教員時代、結婚生活を回想した心温まる話がいっぱい詰まっている。戦記ではなく「自分史」だとする由縁である。

あと一つ付け加えておきたいことがあった。本村は、「ざれ言葉」と謙遜しているが、自分史の「むすび」にしたいとして収録してある十二の詩編についてである。ここで十二編についての解説など必要ないであろう。90年の結晶をかみしめてほしい。

声

息子の手をとり「命が一番大切」と・・・

徳島県　森本広江

昨年６月 29 日に家族でひめゆりの塔を訪れた徳島県の森本広江と申します。小学校６年生の息子、遥海が、語り部としてお話をしてくださった新崎昌子さんのことが忘れられず、夏休みの読書感想文で「白旗の少女」を読みました。新崎さんが、遥海の手をとり、「命が一番大切なの。命を大切にしてね。」とくり返し話してくださったことと、「白旗の少女」の富子さんのお話に思いをはせ、自分の気持ちをつづった感想文が、徳島県のコンクールで特選となり、中央審査に送られることになりました。

新崎さんから、「私達は、二度と戦争をしてはいけない」ことと、「平和のありがたさ」「命の尊さ」を後世に伝えるために平和祈念資料館が作られたと伺いました。「体が痛くても親友の良子さんのために、命ある限りがんばりたい」ともおっしゃっていたことが、私たち家族の心に深くつきささりました。

私は小学校で教師をしております。教師になることを夢見ながら亡くなったひめゆり学徒隊の方々のことを考えると、今、自分にできることは何か、自分に課せられた責務を考えます。息子も、「命を大切にしなければ」「戦争は絶対おこしてはならない」という思いを強くしたようです。

新崎昌子様、貴重なお話を聞かせてくださいまして、ありがとうございました。

ぼくは、この夏、家族でひめゆりの塔に行き、ひめゆり学徒隊員だったおばあさんのお話を聞くことができた。おばあさんは、八十八才。ぼくのひいおばあちゃんと同じくらいだから、立って資料館の案内をするのはしんどいはずだ。でも、「私は、命ある限り、戦争のむごさ、平和のありがたさ、命の尊さを伝えていきたいの。」と、心をこめて話してくれた。（中略）二度と戦争を起こさないために、亡くなった親友のために、体の痛みをがまんして語り部を続けるおばあさん。ぼくは、おばあさんや富子さんのことを一生忘れない。そして、おばあさんたちの思いを伝えていくのは、ぼくたちの役目だと思う。この世で一番大切なのは、命だと。

（第 62 回　青少年読書感想文全国コンクール　中央審査作品「この世で一番大切なもの」抜粋　森本遥海）

資料館ガイド

◆多目的ホールご利用のご案内

当館ではひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約 45 分）、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。ご予約時間は以下のとおりです。お電話にて空き状況を確認後、ＦＡＸかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話・ビデオ】9：00　10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00　16：00

※ビデオ作品　○証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」（25 分／ 1994 年）
　　○アニメ「ひめゆり」（30 分／ 2012 年）

※年末年始（12 月 30 日、31 日、1 月 1 日～ 3 日）・旧盆（旧暦 7 月 13 日～ 16 日）は、講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6 月 21 日～ 24 日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

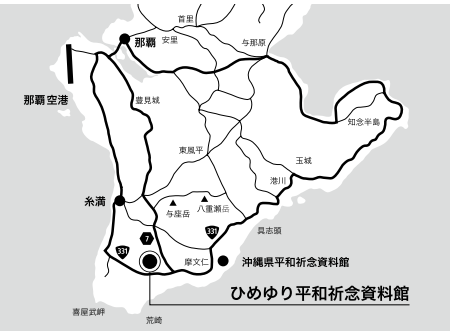
●収容人員：約 200 人（席）
●資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。
●多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。
●予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

◆ＶＴＲ室のご利用について

証言ビデオ「平和への祈り―ひめゆり学徒の証言」とアニメ「ひめゆり」等映像作品を視聴することができます。詳細はお問い合わせ下さい。

◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前９時～午後５時（閉館は午後５時 25 分）　②休館日　年中無休
③入 館 料　大人￥310　高校生￥210　小・中学生￥110
　　団体料金（20 名以上）大人￥280　高校生￥190　小・中学生￥100
④交　　通
【バス】旭 橋・那覇バスターミナルから〔89〕で 約 30 分、
糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約 15 分、
ひめゆりの塔前下車
【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約 4 分、
赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89〕に 乗車し約 20 分。
糸満バスターミナルで〔〔82〕〔107〕〔108〕に 乗り換え約 15 分、
ひめゆりの塔前下車
【車】那覇空港より約 30 分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第 59 号
2017 年（平成 29 年）5 月 31 日発行
編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館
〒 901 - 0344　沖縄県糸満市字伊原 671 - 1　☎ 098 - 997 - 2100
URL http://www.himeyuri.or.jp/